
今

草木原 蒼画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今

【Nコード】
N8523B

【作者名】
草木原 蒼画

【あらすじ】
「あなたは、どうして生きているの？」

「じゃあね、岬」

「バイバイ」

ボクはそう言ってみんなとは反対方向の電車に乗り込んだ。

ボクだけ帰る方向が逆なんだよね。

で、乗り込んだ電車は多からず少なからず。立っている人は殆どいないけど椅子も殆ど埋まっているといった感じだ。朝のラッシュに比べれば天国と地獄だ。

丁度、目の前の席も空いてるし座ろうと。

ボクが座った席の前には一人の男の人がいる。

何処にでもいる様な若者だった。本典型的な若者だなあ。ボクが男の人に感じたのはそれだけだった。それだけを思い読書をしようとしたとき男の人が話し掛けてきた。

「ねえ、何処の高校？」

ナンパか何かかな？ 無視するのも良いけど面白そうだから少し乗ってみよう。

「彩樹高校だよ」

「彩樹高校？じゃあ、頭良いんだ」

まあ、彩樹高校はこの辺りじゃ進学校として有名だけどそこに行ってるからって頭が良いって決めつけるのはどうかと思うよ。

でも、ボクのそんな思いも知らず男の人は話を続けてくる。

「何年？」

「二年だけど」

「俺は三年」

男の人はこれまた姿に反さない歳をしていた。

「いつも一人なの？」

「うん」

「寂しくないの？」

「別に、寂しくないけど」

ボクはこうやって一人で入れる時間も好きだ。電車の振動に体任せて色々なことを考えているといつもと世界が違って見えてくる。

「友達とかはいるの？」

「いるけど、どうして？」

「いや、なんか暗い感じだから友達とかいないのかなと思って」
ちよつとそれは酷い言い方じゃない。そんなたった数分の話の中で人のこと決めつけないですよ。

それにボクの何処が暗いの？

相当文句を言いたかったけどちよつと我慢。

「いつも友達と何してるの？」

「話してるよ」

「どんな話？」

それはちよつと答えづらいな。大抵はたわいもない雑談ばかりだし。どんなって聞かれてもなんて答えて良いのかな？

「趣味とかないの？」

ボクが黙っていると男の人は別の話題を振ってきた。

あれ？ この人なんか変な気がする。

ナンパとかそんなんじゃないやなくてボクに話し掛けてきた様な気がする。何でだろう？

「特にないかな」

これは正直な話だ。ボクにはこれといって趣味なんて無い。大好きなアイドルもいないし、何かに熱中した事なんて無い。

「ないの？いつも見てるテレビとかもないの？」

あ、やっぱり信じてくれなかったかな。

「うん、無いよ」

でも無いものはない。テレビ番組だってお兄ちゃんたちが見ているのを横で見ているぐらいだ。

「本当に？」

男の人はまだ信じてないみたい。普通の人なら好きなテレビ番組

の一つはあるだろうから無いっていうのは異常なことなのか？

「じゃあ、いつも家で勉強ばっかしてるの？」

「そうじゃないけど」

というかボクは家で勉強なんて殆どしない。宿題だって家でいないときがある。なんか乗る気が無いとき時だったら学校でしているものだ。

「え、そんなんで人生楽しいの？」

何でそこまで話が飛ぶかな？ 確かに好きなテレビとか何も無いけど普通そこまで話が飛ぶかな？

「まあ、楽しいけど」

「嘘でしょう、何処が楽しいの？ 全然楽しそうじゃないよ」

楽しそうじゃないって。あなたは一体ボクの何を知ってるって言うの？ いくら何でもそこまで言うことないじゃん。

あ、でも、今ので気づいた。

この人から感じた違和感の正体を。この人全然楽しそうじゃないんだ。偏見かも知れないけどナンパしてるのなら笑顔が基本だとボクは思ってる。

それなのにこの人は一回も笑ってないんだ。

「じゃあ、将来の夢とかある。希望ってある」

また、話が少し飛んだような気がするな。

「将来の夢とかないよ」

「夢が無いのに何で生きてるの？ そんなんで人生が楽しいわけないじゃん」

あ、そう言うことね。確かに一理あるかもね。でも、先を見るだけが人生じゃない。

「今が楽しいから」

「好きなテレビとか趣味とかないのに何処が楽しいの？」

この人、一体なんなのだろう。

「本当は楽しくないよね。こんな世の中楽しくないよね」

この人、危ない。ボクはこの時、そう感じた。得体の知れない恐

怖がある。もしかしたら、この人……。

「だったら、一緒に死にません」

やっぱり、この人自殺志願者だ。だから一回も笑わないのだ。その上ボクを仲間にしようとしている。勝手にボクのこと誤解している。

「嫌です」

「でも、人生楽しくないんでしょう」

「楽しいです」

「嘘だ。一体何が楽しいんだ」

確かに、ボクは好きなテレビとか熱中できる趣味も将来の夢も何もないよ。そんなのきつと普通に考えたら楽しくない生活かもしれない。この人みたく死にたくなる様な生活かもしれない。

でも、ボクはこの生活を楽しいと思ってる。こんな日常が大好きだ。だって、

「みんなと一緒に話せるから。笑ってられるから」

そう、だからボクは毎日がとても大事だと信じてる。みんなと顔を見て話して、笑っていること、当たり前のことだけど掛け替えのないものだ。

「え……」

男の人は絶句している。好きなテレビを見たり、趣味に熱中しなかつたって人生は楽しく生きていける。こういう考えはもしかしたらボクだけなのかもしれないけど、昔の人はテレビとか無かつたし、今ほど多くの遊び道具も無かつた。そんななかで人々は他人との接触が楽しみで生きていたのかもしれない。

「だから、ボクは死なないよ」

ボクがそう言うとなりの人は席から立ち上がってしまった。

何処に？ そう思ったけどどうやら電車から降りるみたいだ。ボクは男の人を何も言わずに見ていた。

そうして、男の人は降りてドアも閉まり電車は走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523b/>

今

2010年10月11日23時37分発行